

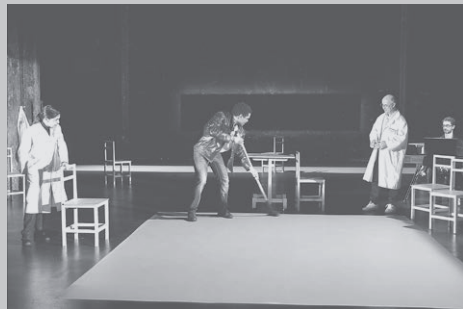
演出ノート

ピーター・ブルック、マリー＝エレヌ・エティエンヌ(作・演出)

私たちが劇場に行くのは、驚き、そしてさらに魅了されたいからである。私たちは、自分と密接にかかわりがあると感じるときにしか、関心を持たない。だからこそ、二つの相反する要素がうまく噛み合うことが重要なのだ。それは、「身近なもの」と「非日常的なもの」の二つである。

私たちが初めて脳の迷宮への冒険に出かけた『ザ・マン・フォー』という作品は、過去には都合よく「気が狂っている」と見なされていた神経学上の症例を題材にしている。何より驚いたのは、見た目には私たちが変わらないのに、各々の症状ゆえに、全く予測ができないような行動をとってしまう患者たちとの出会いだった。彼らを見つめていると痛々しく、時として笑いを誘うこともあるが、常に深く人間的な感動を呼び起こされる。

今日、もう一度、私たちは脳の中を探求してみたい。この作品は登場人物たちを通して、観客たちを全く新しい未知の領域へ連れていく。彼らの営みは、あまりにも強烈で、音楽や色や味、イメージや記憶の中にどっぷりとつかっているがために、まるで天国から地獄へ、またはその逆方向へと日常的に行き来するかのようである。



『驚愕の谷』というタイトルは、偉大なベルシャ人の詩人、ファリドゥッディーン・アッタールの『鳥の言葉』という作品と関連している。

私たちは人間の脳内という山岳地帯を探索する。力強く地面を足で踏みしめ前に進みながら。その一步一步がより遠く未知の世界へと私たちを連れいくのだ。



©Colm Hogan

ピーター・ブルック

1925年ロンドン生まれ。演劇・オペラ演出家、映画監督、作家。その長いキャリアを通して、演劇、オペラ、映画、執筆活動等、さまざまなジャンルで優れた業績を収める。1971年、国際演劇研究センター(CICT)をパリに設立、1974年にブッフ・デュ・ノール劇場に恒久拠点をオープンし『鳥の会議』、『桜の園』、『マハーバーラタ』など話題作を次々と発表。オペラも手がけ、『フィガロの結婚』、『魔笛』などを演出。



©El País: Alvaro Garcia

マリー＝エレヌ・エティエンヌ

演出家。1974年『アテネのタイモン』のキャスティングを手がけ、1977年『ユビュ王』より国際演劇研究センター(CICT)に参加。以後『カルメンの悲劇』『マハーバーラタ』『テンペスト』『ベレアスの印象』『起きて、アルバート!』『ハムレットの悲劇』など全作品に携わる。『Qui est là』ではドラマトウルクを担当、『ザ・マン・フォー』『Je suis un Phénomène』をブルックと共同執筆。キャン・センバの『ザ・スーツ』、『魔笛(ピーター・ブルックの魔笛)』などの翻案、『ティエルノ・ボガール』の執筆も手がけている。

音楽家・土取利行(Toshi)に聞く、ピーター・ブルックの創作現場

桂 真菜(舞踊・演劇評論家)

ピーター・ブルック演出『驚愕の谷』(共同脚本、演出:マリー＝エレヌ・エティエンヌ)は、2014年春にパリのブッフ・デュ・ノール劇場で幕を開けた。5月に筆者が訪れた同劇場のステージには、自然と人間と文明をめぐるブルックの思索が結晶していた。

本作のテーマは脳の謎で、その迷宮に迫るモチーフが共感覚。ひとつの刺激から複数の知覚を得る共感覚者は、音に色を感じたり、色に匂いを感じたりする。物語の主人公サミー(キャサリン・ハンター)は、並はずれた記憶力を持つ共感覚者だ。神秘的探究と科学への関心が、12世紀ベルシャの詩人アッタールの物語詩を通して響き合う芝居は、観客を涙と笑いで包む。数少ない小道具と出演者だけが存在する「なにもない空間」で、肉眼では見えないものを観客に想像させる「ブルック・マジック」は、どのように生まれるのだろうか。

この疑問に答えてくれるのは、ブルックと40年近く舞台を創ってきた土取利行。縄文など古代の音楽の研究、フランスの壁画洞窟での演奏、といった前人未到の領域を拓く土取に、ブルックの特徴を尋ねた。

「ピーターは常に人間の本質を見つめています。『人間とは何か』と、どんな作品においても考え続けている。そして、スタッフと一緒に、芝居を最初から作ります。分業で作ったパーツを貼り合わせる方法はとらない。僕の音楽も共に即興で作ります。舞台でも即興で演奏していきます。演技に関しても特定のメソッドを、一律に当てはめたりはしません。厳しくも柔軟な稽古場が、ほかのどこにもない作品を培っていきます」

長男のサイモン・ブルック監督がワークショップを撮影したドキュメンタリー映画『ピーター・ブルックの世界一受けたいお稽古』(2012年、原題: Peter Brook: The Tightrope)で稽古の片鱗が伺える。慈愛と尊厳をたたえたブルックが、説く哲学も胸に残る。この映画の収録にも、土取は招かれた。架空のロープを歩く「綱渡り」のエクササイズに挑むメンバーにはヨシ筈田、マルチェロ・マーニ(『驚愕の谷』に出演)ら経験豊かな俳優と若手が共存。参加者の出身地も多彩だ。



『驚愕の谷』パリ公演より

「さまざまな文化が溶け合うインターナショナルな世界が、ピーターの演劇の核。各国から集まった人間が、舞台を豊かにします。差異こそが創造の根源——この信念を抱いて、あらゆる文化を敬い、違いを受け入れながら新しい文化を創り出す姿勢は、初めて会った時から一貫しています」

ここで土取の歩みを少し紹介しよう。1950年に香川県に生まれた土取は10代でモダンジャズを始め、次第にフリージャズに情熱を傾ける。やがて20代半ばで、ブルック率いるC.I.C.T.(国際演劇創造センター)に参加していた俳優、ヨシ筈田・演出の演劇『般若心経』の音楽を担当し、海外公演先のパリでブルックに出会う。すでにパーカッショニストとしてニューヨークでミルフォード・グレイブスなど優



映画『ピーター・ブルックの世界—受けたいお稽古』シアター・イメージフォーラム(11:15/21:15)ほかで公開中。http://www.peterbrook.jp
©Brook Productions / Daniel Bardou

れたミュージシャンと競演していた土取だが、「演劇には関心が薄く、ピーター・ブルックも知らなかった」と振り返る。

ブルック演出の即興芝居に協力するうち、77年にブッフ・デュ・ノール劇場で初演されたジャリ作『ユビウ王』の音楽を任された。その後、土取が音楽監督を務めた作品の中には79年の『鳥の会議』や、85年にアヴィニョン演劇祭で初演された『マハーバーラタ』(88年に来日公演)も。後者は採石場跡地で9時間にわたって繰り広げられた歴史に残る大作だ。

「ピーターは『マハーバーラタ』の準備に、10年以上かけています。スタッフは古代インドの芸術やヒンドゥー教の聖典も勉強した。脚本を書くピーターとジャン・クロード・カリエール、マリ＝エレーヌは、サンスクリット語学者から原文で学んでいます。僕は何度もインドを訪問して、各地で古典楽器や舞踊、民俗芸能を学びました。役者たちも短期間だったけれど、インドを訪れましたよ」

ブルックの演劇では沈黙が重要

緻密な取り組みを続けるブルックには、「質が合う」と感じたものを自由に取り入れる軽やかさもある。シェイクスピア作『テンペスト』(初演90年、91年に来日公演)では、土取の演奏とともに、平安後期の流行歌『梁塵秘抄』に曲をつけた桃山晴衣(1939～2008)の歌を望んだ。

土取は伴侶であった桃山の他界後、彼女が継承した添田唾蟬坊(1872～1944)・知道(1902～80)親子の演歌(政府批判の演説に代わる、ユーモラスな抵抗の歌)を、三味線を弾いて唄う活動『邦楽番外地』を始めた。CD『添田唾蟬坊・知道を演歌する』(2013年、立光学舎)では『マハーバーラタ』の準備期間にインドで習った擦弦楽器エスラジも弾く。

そして、『驚愕の谷』で土取が演奏する楽器は、アラブの太鼓とインドの笛とエスラジだ。和楽器は使っていないのに、外国の劇評には「トシは日本の伝統楽器を演奏」と書かれやすい。

「間が日本のだからかもしれない……。ピーター

の劇では沈黙が重要、今回の舞台でもね。沈黙の深さが、人間を内なるところに連れていく。沈黙の質はせりふと同等に大切なもの。これもピーターが音楽家や役者に要求する重要な点です」

『驚愕の谷』で共演する音楽家、ラファエル・シャンブーヴェはジャズ、クラシック、タンゴなどをキーボードで弾く。土取がバッハの曲でエスラジを弾く箇所は、楽譜に書かれているのだろうか。

「僕はいつも即興! 譜面は使いません。役者の調子でスピードは変わるし、観客によっても音楽は変化していきます。ピーターの繊細な作品には毎回、パフォーマーの繊細さと、敏感な他者との関係性が必要で、予定調和を避けるためにもさまざまなエクササイズや即興訓練をします」

共感者たちが登場する場面では、各人が世界をとらえる特殊な観点が、音と光で立体的に織りなされる。

「実在の共感者たちに僕たちスタッフも俳優も会って、話を聞きました。ピーターは資料を読むだけではなく、いろいろな方向からアプローチして、人間像にリアリティを与えることを重視します」

脳神経科医オリバー・サックス(1933～)著『妻を帽子とまちがえた男』(晶文社)に想を得た『ザ・マン・フー』(1993年初演、1999年来日公演)を舞台化する際も、脚本を共同執筆するブルックとエティエンヌは何度も患者たちへ会って理解に努めた。

サックスが影響を受けたロシアの心理学者アレクサンドル・ルリヤ(1902～77)の著書『偉大な記憶力の物語』(岩波現代文庫)に記されたシー・ことソロモン・シェレシエフスキー(1892～1958)に、『驚愕の谷』の主人公サミーは似ている。彼と同様に記憶術師となるサミーを演じるハンターの身体表現は、以前の作品群に較べ抑制がきいていた。

「キャサリンが暴れないように(笑)、ピーターは注意しつつ、あるレベルを超えさせました。もともと上手い役者だから、抑えるほど演技が輝く場面が出てくる。演奏も手数も多くすれば、ドラマが盛り上がるわけじゃない。激しさを増す役者の動きを楽器で追っかけると、ドタバタ芝居になってしまいます。ピーターは忍耐強い調理人みたいに、キャサリンがひとつの台詞を彼の望むところにいたまで根気よく説得していく。“自分だけで勉強しないで、



映画『ピーター・ブルックの世界—受けたいお稽古』より
©Brook Productions / Daniel Bardou

解釈しないで、皆と分かち合いプレイ(PLAY)しなさい”——そう言いながらね」

貴重な証言に、68年にブルックが著した「現代演劇のバイブル」と呼ばれる著書『なにもない空間』(晶文社)を結ぶ言葉を思い出す。

劇をするには大変な努力が必要だ。しかしわたしたちが努力を遊びとして体験するのなら、それはもはや苦しい努力ではない。劇は遊びである。

(翻訳:高橋康也・喜志哲雄)

自身もブルックのもとで成長した、と土取は続ける。

「人は本来いろいろな楽器を演奏できるのに、クラシック音楽の教育では決まった音楽理論を学ばせ、西洋楽器だけを専門に練習させて、能力を狭めてしまう。ピーターは仕事を通じて、ひとりひとりの可能性を伸ばします。僕がマルチ・インストゥルメンタル・プレイヤーになれたのも、ピーターの演出と彼の方針を守る劇団があったから。いっしょに芝居を創りながら、アフリカやアジアなど広い地域に根づく伝統を調べて、オリジナリティを得ることもできました。つまり、固有の文化と普遍的な文化を同時に学ぶことができたのです。これから、ピーターの次の世代に、彼のような広い視野をもって仕事を積み重ねていく人が出てくるのでしょうか……」

土取利行・音楽略記 <http://d.hatena.ne.jp/tsuchino-oto/>

ブッフ・デュ・ノール劇場の特性と魅力

扇田昭彦(演劇評論家)

演出家ピーター・ブルックについて語る時に欠かせないのは、長年にわたってブルックの演出活動の拠点だったバリのブッフ・デュ・ノール劇場である。バリ北駅の裏手、地下鉄のル・シャベル駅の近くにある。

この劇場は1876年開場という歴史ある劇場で、ミュージック・ホールや寄席演芸の小屋として使われたが、やがて老朽化し、火災もあって閉館し、劇場の存在自体が忘れられていた。

1973年に『鳥の会議』を持ってアフリカなどを長く巡業したブルックはバリに帰り、彼が率いる国際演劇研究センター(その後、国際演劇創造センターと改称。略称CICT)のための劇場を探し始めた。

すると、彼の協力者のミシュリーヌ・ロザンが「忘れられた劇場がある」という情報を聞き込んできた。2人は現地に出かけたが、目当ての場所に劇場は見つからない。だが、ある建物の壁に、穴をふさいでいる板があった。その板を取り除け、腹ばいになって穴をくぐり抜けると、なんとそこに隠されていた廃墟の劇場が現れた！ブルックは発見の興奮をこう書いている。

あった！ 崩れて焼け焦げ、風雪の跡も生々しくでこぼこではあるが、気高く人間臭く、まっ赤に息づいているブッフ・デュ・ノール劇場だ。

(『殻を破る』晶文社、高橋康也ほか訳、1993年)

ブルックは1974年の公演『アテネのタイモン』から、この劇場を常打ち小屋にしたが、彼が偉かったのは、この荒廃した劇場を現代風に仕立て直さず、「そのままの状態に保つ」(同)方針を取ったことである。装飾が剥げ落ちた荒々しい石の壁はそのまま残り、失われていた舞台も新しく設けず、土の土台を劇の舞台にした。廃墟の劇場そのままのリサイクル、再生である。その結果、石と土という自然物から成る。実に簡素で、なんとも美しいユニークな劇場が生まれたのだ。客席にも



© Patrick Tournéboeuf / Tendence four

簡素な木の椅子とベンチが使われた。

私が初めてこの劇場で芝居を見たのは1975年、『アテネのタイモン』の再演だった。

興味深いのは、まるでこのブッフ・デュ・ノール劇場の空間に合わせるかのように、その後のブルックの演出が、装飾性を排除した簡潔な美しさを追求するようになっていったことである。いわば能的な演劇への道。それは祝祭性と視覚性、サーカスの娯楽性にあふれたブルックの代表作の1つ、『真夏の夜の夢』(70年初演、73年来日)とはかなり違う方向だった。

その簡素な美に傾斜する道は、『カルメンの悲劇』(87年来日)、『マハーバーラタ』(88年来日)、『桜の園』(89年来日)、『ハムレットの悲劇』(2001年来日)、『ピーター・ブルックの魔笛』(12年来日)などのブルックの舞台からもはっきりと見てとれる。

特に私にとって印象が深いのは、1991年に来日した『テンペスト』(90年初演)である。来日に先立ち、ブッフ・デュ・ノール劇場で観たのだが、中央にある1つの岩以外、まったく装置がない乾いた土の舞台、舞台の奥と両脇にそそり立つ石の壁。照明が入ると、洗練の極みとも言える簡素な舞台と劇場空間の美しさに思わず息を飲んだ。

2008年にブルックはこの劇場の芸術監督を辞めた。だが、今回来日する『驚愕の谷』を含め、今でもブルックの芝居の初演はここで行われていて、ブルックの劇場、というイメージを残している。

作・演出:ピーター・ブルック、マリー=エレーヌ・エティエンヌ
照明・技術監督:フィリップ・ヴィアラット
出演:キャサリン・ハンター、マルチェロ・マーニ、ジャレッド・マクニール
音楽:ラファエル・シャンブーヴェ、土取利行
舞台監督:アーサー・フランク
制作統括:マルコ・ランコフ
制作:アニエス・クルーティ、マラ・バトリ
協力:フランク・クラウツェック、キャロル・ステーン、オリヴァー・サックス、サイモン・パロン=コーエン、エルコン・ゴールドバーグ、リチャード・シトウィック、イアン・ウォーターマン、ジョナサン・コール、オリア・ピュッポ、フィリップ・ボ、バット・ダフィー、ジェームス・ラザフォード、ジョン・アダムス

製作:C.I.C.T./ブッフ・デュ・ノール劇場
共同製作:シアター・フォー・ア・ニュー・オーディエンス(ニューヨーク)、ルクセンブルグ市立劇場
協力製作:アラス劇場/タンデム・アラス・ドゥエ、ジムナス劇場(マルセイユ)、ウオーリック芸術センター、ホランド・フェスティバル(アムステルダム)、アッティキ文化協会(アテネ)、プレーメン音楽祭、シアター・フォーラム・メイリン(ジュネーヴ)、C.I.R.T.、ヤング・ヴィック劇場(ロンドン)

東京公演スタッフ
技術監督:寅川英司
舞台監督:渡部景介
演出部:重板英理佳
照明コーディネーター:佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター:相川 晶(有限会社サウンドウイーズ)
音響:内田 伸
衣装管理:藤林さくら
字幕:上野詩織(舞台字幕/映像 まくうち)
字幕補佐:ウルリケ・クラウトハイム
翻訳:住吉梨紗(英語)、岸本佳子(フランス語)
通訳:石井園子、河井麻祐子
記録写真:松本和幸
制作:松嶋瑠奈
フロント運営:後藤由香理
FITインターン:加藤希美、川村知也、木田みり
後援:在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本
主催:フェスティバルトルキョー

サミー・コストスはアレクサンドル・ロマンヴィチ・ルリヤ著『偉大な記憶力の物語 ある記憶術者の精神生活』にて公開されたソロモン・シエレシエフスキー氏の人生から着想を得ている。また、マジシャン役はレネ・ラバン氏

Text, Direction: Peter Brook, MH Estienne
Lighting: Philippe Vialatte
Cast: Kathryn Hunter, Marcello Magni, Jared McNeill
Musicians: Raphaël Chambovet, Toshi Tsuchitori
Stage Manager: Arthur Franc
Production Director: Marko Rankov
Production Managers: Agnès Courtay, Mara Patrie

The character of Samy Costas is inspired by Solomon Shereshevsky's life which was made public by Alexander Luria in his book "The Mind of a Mnemonist".
The character of the magician is inspired by René Lavand

We thank for their precious help in our research
Franc Krawczyk
Carol Steen,
doctors Oliver Sacks, Simon Baron-Cohen, Elkhonon Goldberg,
Richard Cytowic;
and we are wholeheartedly with Ian Waterman and doctor Jonathan Cole.

We thank too
Oria Puppo, Philippe Beau, Pat Duffy, James Rutherford and Jon Adams

Production: C.I.C.T. / Théâtre des Bouffes du Nord
Co-production: Theater for a New Audience (New York), Les Théâtres de la ville de Luxembourg
Associated Co-producers: Théâtre d'Arras / Tandem Arras Douai; Théâtre du Gymnase (Marseille); Warwick Arts Center; Holland Festival (Amsterdam); Attiki Cultural Society (Athens); Musikfest Bremen; Théâtre Forum Meyrin (Geneva); C.I.R.T.; Young Vic Theatre (London)

Tokyo Production
Technical Manager: Eiji Torakawa
Stage Manager: Keisuke Watanabe
Stage Assistant: Erika Tsubosaka
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Sound: Shin Uchida
Dresser: Sakura Fujibayashi
Surtitles: Shiori Ueno
Surtitles Assistant: Ulrike Krautheim
Japanese Translation: Lisa Sumiyoshi (English), Kako Kishimoto (French)
Interpretation: Sonoko Ishii, Mayuko Kawai
Photographer: Matsumoto Kazuyuki
Production Co-ordination: Luna Matsushima
Front of House: Yukari Goto
Interns: Kimi Kato, Tomoya Kawamura, Minoru Kida
Under the auspices of the Embassy of France, Institut français du Japon
Presented by Festival/Tokyo